



J S C A・千葉2011年新年会開催される トマタニ構造設計 荻谷 修作

去る2月7日（月）午後5時から三井ガーデンホテルにおいて、J S C A・千葉の平成23年新年会が開催されました。ご多忙の中J S C A・本部金箱副会長をはじめ、行政・友好団体から37名、千葉会員56名、千葉協力会員30名の臨席をいただき役員一同、心より御礼申し上げます。

はじめに園部代表から・・・・・・・・・・。続いて、金箱温春J S C A本部副会長から最近の建築基準法の構造関係についての説明があり、最近発覚した相撲八百長事件を姉齒事件の例にあげての話や、J S C Aではサテライトの活動が重要とのこと、本部のこれからの活動について三つの目標を話していただきました。又、これまでのJ S C A・千葉のサテライト活動を賞賛されました。



J S C A本部副会長金箱温春先生

千葉県県土整備部建築指導課宮下智亘課長から構造計算適合性判定業務、千葉ゆめ半島国体等におけるJ S C A・千葉の協力にたいし感謝のことばがありました。2006年の事件以来の今後の課題として昨年、国の有識者会議において見直しが行われている。千葉県としても県内ばらばらの諸規定を統一化する。確認審査の迅速化を図る。耐震改修については今年度民間にダイレクトメールを送る。又、22年の住宅着工戸数が前年より上向っており、県の財政も税収が増加している。最後にJ S C A・千葉の今後の発展を願っているとの期待のお言葉をいただきました。

千葉市都市局建築部建築指導課時田孝哲課長から市民ボランティアにより千葉ゆめ半島国体が成功、千葉ロッテマリーンズの優勝、千葉市の脱財

会員委員会定期便

J S C A千葉協力会員である（株）福田組が（株）リアスに社名変更をいたしました。会社概要は、建設・環境コンサルタント、土壌浄化工事、建築基礎地盤改良工法および耐震地盤工法の販売。（明智・斉藤）

政危機宣言、今後のJ S C A・千葉の発展を願います。との期待のお言葉をいただきました。

千葉県建築士事務所協会荻原幸雄会長から、今日の構造設計技術者の活躍をたいへん喜ばしく思います。技術者集団としてみなさんは大変たのしい存在です。代表、前代表ともにJ S C A・千葉のみなさんが県民のため活躍されることを期待しております。との激励のお言葉をいただき、つづいて乾杯の音頭を発声していただきました。

その後はハンクマサさんのギター弾き語り、協力会員の紹介、ピアノと声楽によるミニコンサートが開かれました。

千葉県立行徳高等学校校舎 耐震補強工事見学会 西原建築設計事務所 西原 幹雄

平成23年1月19日（水）、千葉県立行徳高等学校の耐震補強工事の現場見学会が行われ、見学者は約30人来られました。

初めに設計者である斉藤建築設計事務所 秋山さんより、建物概要及び補強概要の説明がありました。学校校舎としては珍しくS造の純ラーメン構造で、補強設計も通常のRC造とは異なっていて様々な工夫がされており、非常に興味深いものでした。

特に、鉄骨ブレース補強は、ブレースと既存鉄骨の接合を、G. PLを溶接するのではなく、ブレース周囲の鉄骨枠材を、スタッドと無収縮モルタルで既存柱梁と接合する間接接合で行っている、とのこと。



柱が日の字Hのため、接合部に局部的な応力集中が生じるG. PL溶接を避けて、通常RC造で行うような間接接合としている、と説明があり、私自身は初めて見る補強形式だったので、早く現場に行ってみてみたい、と見学が楽しみな気持ちになりました。説明後、施工中の現場へ向かいました。

私自身、今までこのような現場見学会に参加する機会が少なかったため、現場施工担当の大城組酒井さんに色々質問をさせてもらい、特に現場溶接の管理で、ルートギャップの確保を徹底や、



溶接温度や入熱の管理についてなど、今後の仕事に生かしていきたいお話を伺うことができました。

最後の質疑応答は、現場の施工上での苦労話や、設計の秋山さんより、真夏に行われたアスベスト調査がサウナのような部屋での調査となり非常に大変だったこと、などの後日談など、色々伺うことができ、興味深く聞かせて頂きました。最後に、大変有意義な見学会に参加させて頂き、関係者の皆様に深く感謝致します。

建築は巨象 H23.3.14 楠川 邦輔

「群盲象を撫でる」という箴言がある。人間活動の多くの分野において必要であり、その内容（目的）、形式、規模等の多様性、複雑性から建築が巨象あると言う事は問題無さそうだが、建築に携わる多くの優秀な人々を群盲とは言いがたく、小生の自分自身を戒める一自戒の言葉として肝に銘じている。

建築が巨象である事の影響は様々なところに表れる。ある新聞の文化欄で磯崎新氏の「ベネチア国際建築展の報告―建築の初心を取り戻す」を興味深くを読んだ。その数日前に同展においてI氏が企画展示部門で金獅子賞に選ばれた事、又その作品が内覧会で数度にわたり倒壊したとの小記事が同じ新聞に載っていたからである。

磯崎氏は、いわゆる<住める建築>の模型ではないとした上で<石・レンガ・水・光といったベーシックなものに立ち返りゼロからの空間を構成している。直径0.9mmの極細のカーボン製の柱を林立させて空間を囲い、それにより空気を可視化している>

として高く評価している。長く建築構造に携わってきた者として上記の論評に大きな違和感を持った。その第一は住むための建築ではないという作品を建築としている事である。住む必要が無ければ、現実的に住む建築として沢山の人が苦心している事が不要のものとなり、建築に対する正しい認識を大きく損なう事となる。この作品に建築という言葉を用いるべきではない。

第二にこのような内容の架構に倒壊という言葉を使用すべきではない。倒壊なる言葉に値するような架構ではない。

上記の場合は少し極端かもしれないが、我々仲間内でも例えば木造建築の話の時に一方は伝統的な神社建築をイメージして話しており、他方はもっと小型の住宅建築等をイメージして話を進め、終わり頃になりそれが分かって、しまったと思ったりする事がある。要は巨象・建築が持つ内容の豊富さとその多様性とともにもその区別をきちんと認識する必要があるという事ではないだろうか。

建築に関する法規も場合も同じように考えられる。特に建築構造の場合、この巨象を生き生きと活動させる為には、法規で束縛する事は「百害あって一利無し」である。建築構造設計者が、専門領域において不断の努力と研鑽を重ね、社会人として倫理意識をもって職分を遂行する事が社会的に非常に有益である。

それと逆行する現在のような度を過ぎた建築構造に関する法規制は建築構造設計者の自らの向上に対する意欲の喪失と無力感を醸成してしまう。又この問題にはコンピューターの発達と共に間違った方向へ建築構造設計を誘導してしまう要素があり十分に注意してかなければならない。

小生は大学、大学院時代を通じて良き師、良き友に恵まれてきたが特に日本大学の西村敏雄先生が卒業時に言われた「お医者さんは手術に失敗しても命に係るのは通常一人だが君達は間違えると多数の人達の命を損なう可能性がある。十分に心して仕事をやりなさい」の言葉を胸に40年設計を行う事が出来た。大変あり難い言葉を頂いたものと心から感謝申し上げている。

明るい希望を胸に新年を開こうとしていたのだが、現実にはなかなか厳しい。NZの建物倒壊に胸を痛めていたら、大きな津波による大災害が起きてしまった。特に郷里に近い人達で気の毒で仕方が無い。微力ではあるが皆さんと共にやれる事を精一杯やりたいと思っている。

建築は構造により3次元の命を得る。一緒に頑張ってください。